THE 93RD 独立展'26

会 期／2026年10月14日(水)―26日(月)　会 場／東京・六本木 国立新美術館

DOKURITSU EXHIBITION

地方巡回展

■大阪展
大阪市立美術館 天王寺ギャラリー
2026年 11月 17日(火)―23日(月)

■京都展
京都市京セラ美術館
2026年 12月 1日(火)― 6日(日)

■中部展
愛知県美術館　8F ABC 室
2026年 12月 23日(水)―27日(日)

■福岡展
福岡市美術館　ギャラリー全室
2027年 2月 16日(火) ― 21日(日)

◎詳細は独立展ホームページをご覧下さい。
http://www.dokuritsuten.com

予告

■第94回 独立展
会　期／2027 10/13-25
会　場／国立新美術館
搬入日／2027 9/30-10/1

■独立春季選抜展
会　期／2027 3/24-31
会　場／東京都美術館

独立ノート第15号
発行日／2026年10月1日
発行者／独立美術協会

〒141-0031
東京都品川区西五反田2-13-8-507
Tel.03-3490-5881 Fax.03-6420-0026
E-mail dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp

デザイン・印刷／エーワンネットワーク

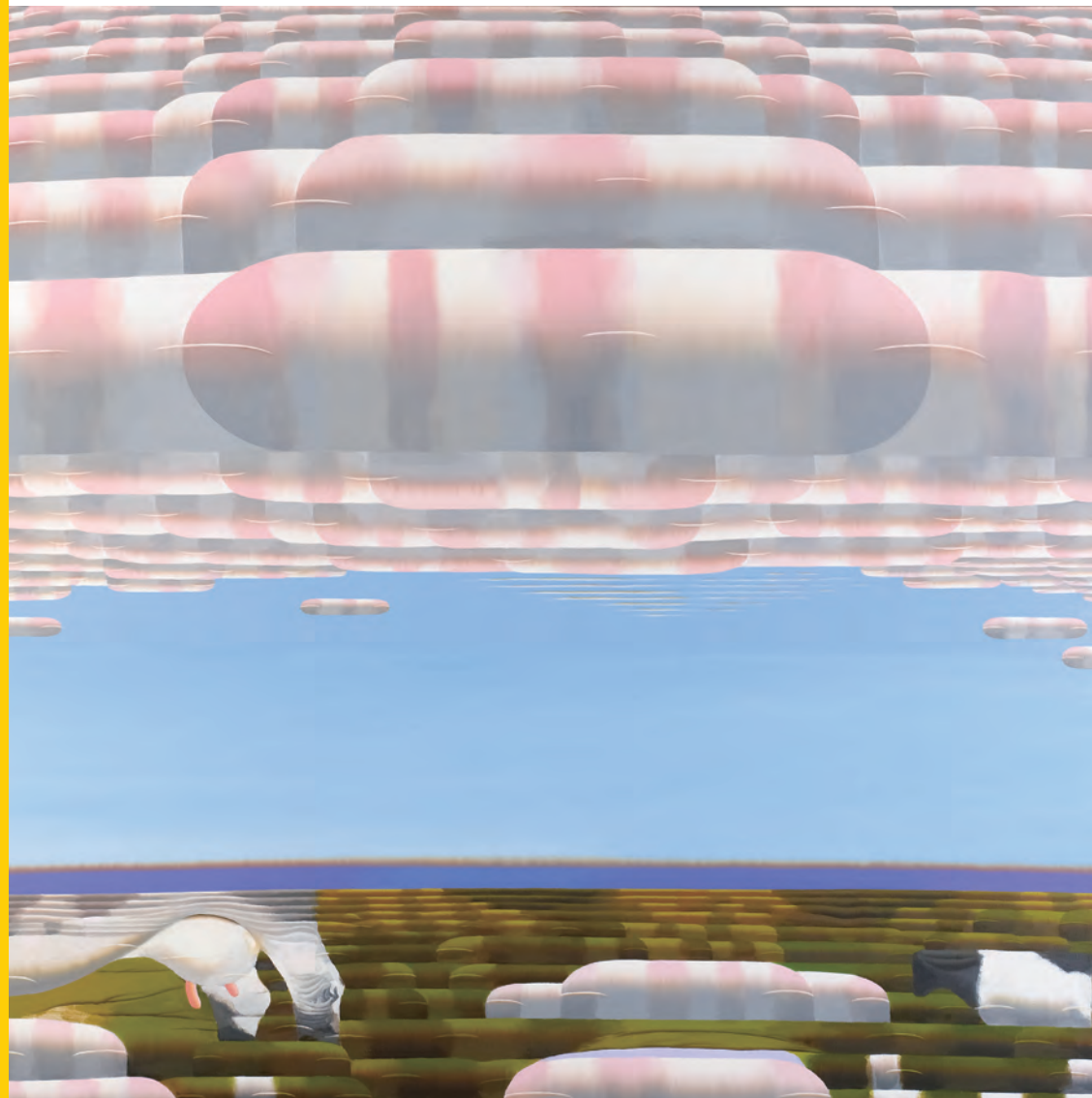
―編集後記―

独立ノートは創刊以来、第15号を迎えた。私自身、第1号から編集に携わってきたが、振り返れば15年という歳月の流れの早さに改めて驚かされる。この15年、独立展の歩みとともに独立ノートも少しずつ姿を変え、進化を重ねてきた。時代の空気や新しい感性をできる限り取り入れながら、第15号も無事にまとめることができた。ご協力いただいた執筆者の皆様をはじめ、編集に携わってくださったすべての方々に、この場を借りて心より感謝致します。

「発刊にあたり」での事務所委員Hの文章から次号についてもじんわりとしたプレッシャーを感じる。それを受け流しながらも、何だか不思議とむずむずするような期待が芽生えて来たりもする。独立展とともに、独立ノートもまだまだ進化していく…かもしれない。

独立ノート ANNUAL DOKURITSU note No.15 2026

■独立レジェンド/松本英一郎　■独立キーパーソン/木梨 修が語る
■アトリエ探偵団/山本雄三　■特集/本当は教えたくない！―私のこだわり―





独立美術協会小史

【誕生ー初期】(1930ー1959) 1930年11月1日、清水登之(43歳)、鈴木保徳(39歳)、川口軌外(38歳)、小島善太郎(38歳)、児島善三郎(37歳)、中山巍(37歳)、鈴木亜夫(36歳)、里見勝蔵(35歳)、高畠達四郎(35歳)、林重義(34歳)、伊藤廉(32歳)、林武(32歳)、福沢一郎(32歳)、三岸好太郎(28歳)という14名の気鋭の画家たちが独立美術協会を設立し、翌年1月には東京府美術館で「第1回独立展」を開催した。
初期段階で野口弥太郎、須田國太郎、小林和作、海老原喜之助、鳥海青児らが会員として迎えられる。
第1回展は3,058点、第2回展4,853点、第3回展では5,000点を超える搬入点数があったと記録されており、他の団体を超える「熱狂的な支持」を得ていたことが分かる。この期に独立は近代史に輝く画家集団として確固たる地位を築き、「独立展」は俳句の「季語」になった。

【中期】(1960ー1984) 現代の洋画壇でも中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続く。

【現在】(1985ー) 独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁芸術家在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年6月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。
一方独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化して行った。
独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価してきた。また「審査することは、同時に審査されること」という自覚を持って運営し、現在にいたる。
批評家・学芸員・会員によるギャラリートークも好評を博している。



独立ノート 第15号　発刊にあたり

独立展はコワモテの印象があるでしょうか？少々近寄りがたいとか？
「もっと独立に親しみ持っていただきたい、画家の思いやドラマや泣き笑いを届けたい」との思いから、東日本大震災の年に独立ノートを創刊しました。
独立展と独立ノートを併せてご覧いただければ、「作品」と「人」のなんとも多彩で深味あるところを感じ取っていただけるはずです。
こんな絵描きがいたのか！この人にしてこの作品か！と。
どうかこのノートを手で掲げ「もっと独立の作品が見た～い」と推していただきたい。それを目にすれば自らの制作を余所に、この 15 号を仕上げた編集委員は「しょうがない来年もやるか」と腹を括ることでしょう。多分。いや、きっと。

事務所委員　浜松繁雄

目次

- ❖ 独立美術協会小史 ―― 表紙裏
- ❖ 独立ノート第 15 号発刊にあたり ―― 1
- ❖ 独立レジェンド／松本英一郎 ―― 2
- ❖ 独立キーパーソン／木梨修が語る ―― 4
- ❖ アトリエ探偵団／山本雄三 ―― 6
- ❖ 特集 本当は教えたくない！ー私のこだわりー ―― 8
- ❖ 独立ホットニュース ―― 10
- ❖ 独立人ーひとりたつひとー ／武藤はるか ―― 12
- ❖ 第 93 回独立展地方巡回展 ―― 裏表紙
- 第 94 回独立展告知

制作：独立ノート編集室
梅野顕司　木村小百合　小金井ケイコ　児玉沙矢華
阪本聡　髙橋雅史　千葉光　宮地明人
和田道雄
協力：画像提供／多摩美術大学美術館　都城市立美術館
福岡県立美術館　府中市美術館
馬越陽子おふせ記念美術館
表紙：松本英一郎「さくら・うし」 120号S 1990年
油画・画布　福岡県立美術館収蔵

ANNUAL DOKURITSU note 2026 独立ノート 15

釣りを愛したリアリスト

松本英一郎

まつもと　えいいちろう
Eiichiro MATSUMOTO



「松本英一郎展」青梅美術館 2007 年発行図録より

松本英一郎氏が亡くなったのは 25 年前、68 歳。福岡県久留米市の出身。高校は、県内の名門、県立明善高校。この高校、進学校なのに美術界のビッグネームを多数輩出している。画家は、青木繁、坂本繁二郎、評論家の河北倫明等々。そんな高校であったから大目に見られたのであろうか。授業をさぼり、傍らに一升瓶の酒を置いて、石膏デッサンを描いていたと言う逸話がある。そんなやんちゃな気質が、後に顔を出すエピソードがある。真偽のほどは分からないが、多摩美術大学の教員時代、大学の敷地内に自分専用の釣り堀を持っていた？松本は、趣味人の顔を持つ。

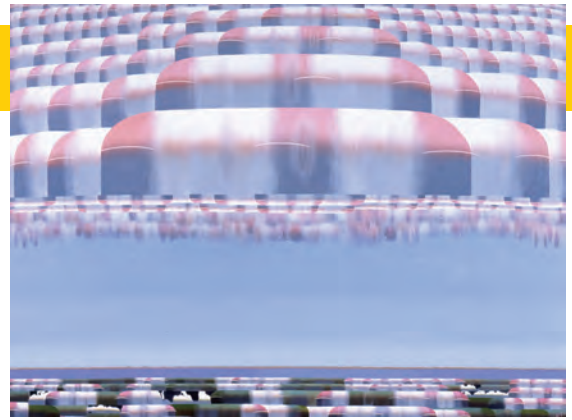
そのひとつが、釣り。それも、ヘラブナ釣り。“釣りは、フナに始まりフナに終わる”と言う格言があるように、奥の深い釣りだ。傍目には、のんびり、優雅に見えるが、目は浮きの動きを注視し、そこから水中の魚の反応を想像し、それに合わせて、仕掛けと餌の微妙な調整を頻繁に行い、魚を釣るための最適解を導き出す。繊細な思考と、粘り強い観察力が必要な釣りである。松本のライフワークとも言うべき、定点スケッチと名付けた水彩の風景画シリーズがある。大学の自分の部屋の窓から見える景色を、水彩で描き留めたものだ。何日も、何日も、飽きもせず描いたであろう。膨大な枚数である。



「土牛」100変 1961年 油彩・板 府中市美術館蔵



《定点スケッチ》1991.10.28 36.1×54.6cm 水彩・紙・鉛筆
多摩美術大学美術館蔵



「さくら・うし・92」200F 1992年 油彩・キャンバス 都城市立美術館蔵

実際の風景をていねいに
納得いくまで取材し、
それを元に作品作りをしてきた。

日によって違う表情を見せる景色を、まるで、ヘラ浮きの微妙な反応を注視するように観察していたに違いない。画風の変遷にも、それは感じられる。同じテーマを何年にも渡って、粘り強く追及し続ける。そこに一貫していたのは、リアリズムである。一見空想画のような風景が説得力を持つのは、粘り強い観察と、深い洞察力に裏打ちされている。そして、最後になったさくら・うしシリーズで、技術的には、高い完成度に到達する。“検査で心臓内部の血管造影をやったんですけど、造影剤が入ったとき、今まで経験したことのない刺激を感じましてね。まず末端から熱くなるんですが、その刺激に対して、雲型のピンクのものが頭の中にパーンと浮かびます。退院してきたら裏山に桜が咲いていて、ああ桜だったのかと思いました”～リアリストの一端が感じられる本人の言葉である。さくら・うしシリーズの空に浮かぶ飛行船のような物体。それを、松本は実際に見ていた。ヘラブナには、相当のめり込んでいたようだ。今は廃刊になっているが、“月刊へら”というマニアックな雑誌に定期的に執筆してもいたようである。そんなヘラブナマニアの松本、学内の池にフナを放して、釣りに熱中していた。繰り返しになるが、真偽は不明である。多摩美術大学のキャンバスに池は無かった（卒業生の証言）。そして、池は無かったが、屋外プールはあった（卒業生の証言）。夏は水泳部が使用していたようだ。冬の時期、手入れの行き届かない藻だらけになったプール。松本にとっては、いい釣り場に見えただろう。その時、再び、高校時代のやんちゃな気質が顔を覗かせて、そこにヘラブナを放流したとしたら。プールサイドでひとり、じっと浮きを見つめる松本の姿を想像してしまう。



松本英一郎 56歳 後列左 1988年3月撮影

木梨 修　きなし おさむ　Osamu KINASHI

守りに入ったらいけん。挑戦するんじゃ！



「自画像」F6 1973年



1950	尾道市向島町に生まれる
1973	武蔵野美術大学　卒業
1975	同大学院修了、修了制作優秀賞（大学買上げ）
1975 ～78	11 人展（新宿・椿近代画廊）
1979	第 47 回独立展入選　　1996 年まで連続
1985	広島県美術展　大賞
1987,89	広島県美術展　奨励賞
1991,93	第 59 回、第 61 回独立展　新人賞
1992	美術振興奨励　小林和作賞
1996	第 64 回独立展　独立賞
1997	独立美術協会　会員推挙
1997	第 40 回安井賞展　入選
1998	個展（福山そごう美術画廊）
2023	「輝く日本油画」独立美術協会 90 周年記念展
2024	木梨修展　福山しぶや美術館企画展
現在	独立美術協会会員、日本美術家連盟会員

衝撃の出会い

私の学生時代は、公募展に出すよりも個展やグループ展で発表しようという、いわば「公募展離れ」の雰囲気がありました。私自身、仲間 11 人で新宿の画廊でグループ展を重ねていましたが、そこには競争や刺激があまり感じられず、どこか「傷を舐め合う」ような甘さがあったんです。

そんな時、30 歳で初めて独立展に出品しました。私の故郷・尾道には小林和作先生や妹尾正雄先生といった独立のレジェンド、先輩として福島瑞穂先生もおられました。出身大学でも独立の重鎮たちが教授を務めていましたから、自然と足は独立へ向いていましたね。初入選の時のことは今も鮮明に覚えています。3 階の 2 段掛け、双眼鏡がないと見えないような高い場所に飾られた自分の絵を見て、独立展のレベルの高さ、多様な表現に「衝撃」を受けた。あの日が私の原点です。

人物から風景へ

私の画業は「静物」から始まり、その後 10 年ほど「人物」を主役に据えた時期がありました。当時の独立には人物画の大家が多く、知らぬ間に触発されていたのかもしれません。「独立賞」を受賞したのも、人物の背景に瀬戸内の景色、廃船や漁具などを配した作品でした。しかし、会員になってから、大きな転換期が訪れました。それまで人物の背景（脇役）だった「海」や「風景」を主役にしたいという欲望が湧いてきたんです。地元の「しまなみ海道」を皮切りに、より激しい生命感を求めて高知の室戸岬や北陸の東尋坊へ足を運びました。モチーフは変わっても、絵を描くことの根底にあるのは「自然が持つ生命感」をどう画面に定着させるか、という一貫した問いです。

「独立」の懐の深さ

独立展の審査は、会員全員が参加する民主的なものです。瞬時の判断で決まる厳しさもありますが、そこには所謂「独立らしさ」という決まったパターンはありません。どんな表現も受け入れる「懐の広さ」が独立の魅力です。審査に携わって 20 数年経ちますが、「審査することは、同時に自分も審査されること」です。これは、作家としてのプライドを賭けた真剣勝負の場なのです。











「蒼の情景'96赤い服」F130 1996年 独立賞



アトリエは広く使いやすいが 2 階のため大作の出し入れは窓から

地方で描き続けること

地方の出品者にとって、公募展の存在は非常に大きなものです。特に若手にとっては、比較的少ない経済的負担で大きな会場に作品を並べ、多くの人に作品を見てもらえ、全国にネットワークができる。これは個展だけでは得られない財産です。最近、広島支部でも若い世代から中堅世代まで活発な動きが見られます。「三人展」のようなグループ活動を通じて、お互いに刺激し合い、それが本展（東京）へ出品するエネルギーに繋がっています。地方だからこそ描き続けられる環境があるのです。

「挑戦」し続けよう

今の若い世代は、経済的な厳しさや生活の忙しさから、たとえ美大を出ても、卒業後に制作を続けていくことが難しい時代なのかもしれません。しかし、生活の中でたとえ何かを手放してでも「制作することに挑戦する気持ち」を忘れないでほしい。他人の意見を聞くことも大切ですが、最後は自分が決める。自分の信じた道を行く。自分独自の表現や個性は、描き続けることへの不安や恐怖を打ち破って挑戦していく中でしか磨かれません。

私もこの年齢になっても、守りに入ったら終わりだと思っています。殻を打ち破り、常に新しい表現に挑み続ける。それが「独立人（ひとりたつひと）」としての矜持ではないでしょうか。

【最後に】

私が 21 歳の時に広島県北出身で独立展でも活躍した伝説的画家・靉光（あいみつ）の生家を友人と訪ねたことがあります。志半ば 38 歳で戦死した靉光の母や妹から当時の話を聞き、彼の絵を描くことへの執着心や生き様に触れ、「絵が自由に描ける平和の尊さ」を痛感しました。独立の歴史は、こうした一人ひとりの作家が抱く「描くことへの渇望」によって紡がれてきたのだと強く感じます。



「潮風'22 東尋坊」F200 2022年



「醍醐桜（真庭）」F200 2023年

山本 雄三 やまもとゆうぞう Yuzo YAMAMOTO

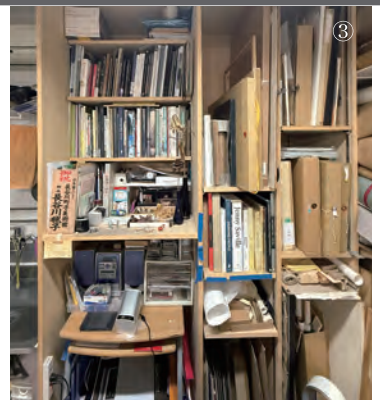
山本雄三会員のアトリエは、静かな住宅街に建つ一軒家を改装した空間である。二階の和室をつなげて天井を高くし、一部の床面積を拡張することで、開放感のある制作空間を実現している。大作の制作時には、作品や自身の位置を適宜変えながら、室内を柔軟に使い分けて制作にあたる。室内は非常に清潔で整然としており、その様子からは作品にも通じる氏の丁寧な人柄がうかがえる。照明は作品に合わせて容易に移動できるよう工夫され、常に安定した明るさのもとで制作できる環境が整えられている。休憩時には、プロジェクターで映像を天井に映し、長椅子で仮眠を取ることもある。制作効率を高める工夫が随所に施されたこのアトリエは、氏の創作活動を支える重要な場所となっている。



①アトリエ中央には父・山本恵三会員から送られた古いH型イーゼルが置かれている。棚などはすべて雄三会員の自作。



②現在は個展制作中だがこのスペースを利用して大作を描く。



③整理された資料。卓上にはプロジェクター





④幼少期の雄三会員と父・恵三会員
⑤会員推挙時の両会員



「秩序のない食卓」F130 2000年 独立賞



「Will the black rain fall again?」P150 2024年



「2010年－七月のある朝」P100 2010年
第８回前田寛治大賞



⑥制作中の山本雄三会員

略歴

1964 鳥取県に生まれる
1991 武蔵野美術大学大学院修了
2000 独立展 独立賞
2002 昭和会展 日動火災賞
2009 第28回損保ジャパン美術財団
選抜奨励賞展 秀作賞
2010 第8回前田寛治大賞展 大賞
2025 日本のリアリズム - AIブームに
おける写実画家たち(台北)

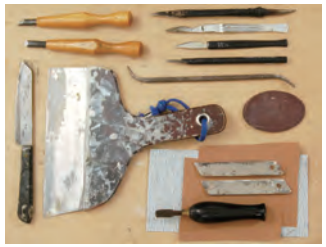
その他国内外にてグループ展多数

現在：独立美術協会会員
女子美術大学短期大学部教授

展覧会インフォメーション
個展2026/11/6(金)~11/13(金)日動画廊

「独自の絵肌を求めて」　阿部栄一





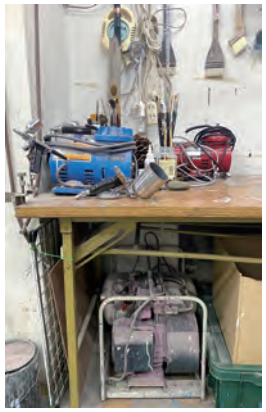
タピエスの壁の様な作品に代表される荒々しく表情豊かな絵肌。また、それとは異なる手触りを覚える藤田嗣治や松本竣介の絵肌。それらを併せ持った独自の画面を求めて制作を続けてきたように思います。
制作は、まず床に平置きしたキャンバスへ下地剤（アクリルのジェッソとモデリングペーストなどの混合液）を容器から直接キャンバスへ流しがけをします。次にこの下地剤が生乾きのうちに、作品のイメージを描き起こすように幅広の刷毛やローラーなどを使って、下地剤を盛り上げたり薄く延ばしたりすることでキャンバスに表情を与えます。
下地層が求める表情と厚みになると、下地層の上にアンバー系の絵具で下絵を描き構図を決定。その後、具体的な描画作業を進めます。描画する際も絵具を塗り重ねるだけでなく、粗目の紙ヤスリやカッターナイフの刃、また銅版画用のスクレーパー等を使って、画面を削り・傷つけ画面の表情を作り込みます。この工程が独自の絵肌つくりには大切な作業で、望む絵肌になるまで何度も繰り返します。この工程を経て画面が整うと、キャンバスを壁に立てかけ、主に面相筆を使って細部の描写を進め、完成後には画面の光沢を整える為に、必ずグロスメデュウムを塗布してから額装を行っています。



1952　福岡県生まれ
1979　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
1989　美術副読本教材「美術・表現と技法」製作（日本文教出版株式会社）
1990　NHK ビデオ教材「美術・表現と技法」製作（NHK サービスセンター）
2003　第 71 回独立展　損保ジャパン美術財団奨励賞受賞
2005　第 73 回独立展　独立賞受賞（翌年、会員推挙）
2006　第 26 回上野の森美術館大賞展　美ヶ原高原美術館賞受賞
2019　アートビューイング 2019ーART の地産地消（東京都青梅市立美術館）
現在　独立美術協会会員

「Only one is number one」　伊東茂広





技法と言えるかどうか…以前制作していた厚みのある重たい作品ではパネルを自作して（不定形の作品のため）その上にスタイロホーム（断熱材）を貼りカッターナイフで成形した後自作の紙粘土をボンドで接着し下地材を塗りその上からエアブラシで着色していました。そのほか使用した（画面上に貼り付けた）材料は銅板　竹ひご　プリント基盤　電気の配線コード　ペットボトルの蓋　水道の配管のジョイント木片　などホームセンターで探した使えそうな物を接着し砂を混ぜたジェッソで素材感をなくしていました。壊れて行く都市を俯瞰したイメージを作りたかったので。あ！忘れていました。最後の仕上げでは封入樹脂を使っていました。そういえば数字や文字を描くのに市販のステンシルも使いました。とまあ絵だかなんだが良くわからないものを作っていましたので技法とは言えないと思われます。一般的な絵の材料はアクリル絵の具だけですね。最近は真面目に油絵の具や信楽焼の粘土などとプラモデルや子どもの靴、ステンレス版を使い絵画らしくなってまいりました。



紙粘土の素



1961　山梨県生まれ
1984　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
1990　第58回独立展出品　以後毎年出品
1997　第26回毎日現代美術展　賞候補（東京都美術館・京都市美術館）
　　日本の現代美術展（ハーフナルボルグ美術館／アイスランド）
1998　第 8 回山梨県新進作家選抜展　美術館賞受賞（山梨県美術館／甲府）
2000　第18回上野の森美術館大賞展　彫刻の森美術館賞受賞（上野の森美術館・福岡市美術館・彫刻の森美術館）
2005　第73回'06 第74 回独立展　独立賞受賞
2007　第75回独立展　会員推挙
2012　ああっと！さいたま（埼玉県立近代美術館）
2015,17,19 個展（ギャラリーあずま／銀座）
　　他、個展・グループ展多数
現在　独立美術協会会員

「私のあゆみ」　磯貝四郎



①



②



③



④



⑤

①「行進」1978年 第46回独立展
②「碧空」1983年
③「HEKI」1994年 第9回アクリラ奨学者
④「KOKU」2012年 第80回独立展 独立賞
⑤「BURIKI」2024年 第91回独立展



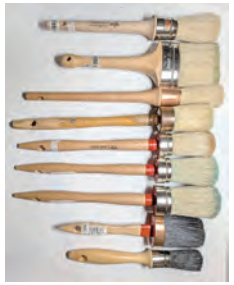
「自画像」2013年

独立出品当初は虚構や虚実の世界をテーマに具象で表現していた。その後、具象の仮象的な要素を取り除いていくと、必然的に抽象表現に成っていった。抽象絵画を続けていくうちに、そこに時間や空間・物の存在など実感できるものを表現していこうと土や石膏・朽ちた木材・錆びた金属片など実在するものを画面に組み入れた。現在はすでにデザイン化された日用品を使用して、そこに塗料を吹き付け、それらを組み合わせ画面を構成している。
これから先、「創造的な表現」を実現するため、日々、いろいろな素材や材料を使ってさまざまな実験や検証を重ねていくつもりです。「これからどうなっていくのだろうか？」私も杳（よう）としてわからない。

○独立展（独立・中山・芝田米三・奨励）賞など受賞 13 回、2013 年独立美術協会会員となる。
○個展（ブロードウェイ・片桐・ＫＡＲＩＮ・攆・古今）画廊
○グループ展（八重洲・攆・青羅・風・るたん・井上・シロタ・暁・向日葵・あかね）画廊、他美術館など多数
○他、日仏現在美術展、上野の森美術大賞展、サムホール大賞展、Lasvegas Museum、朝日アート、アクリル奨学者、他多数

「私の作品に込めたこだわり」　権藤信隆





筆跡が残らないよう叩き筆のように使います。

絵具や筆の棚。
他にも絵具や筆は多数あります。

私のライフテーマは「人間性の回復」と「古典と現代の融合」です。これが制作のこだわりであり表現の柱です。私は、これをネオ・ルネッサンスと名付けています。ヨーロッパの古典作品が持つ圧倒的な表現力や技術力を、今を生きる作家として如何に現代に昇華させられるか。先ず技術的には古典的一般的な油絵技法や混合技法ですが、現代のアクリル系画材などもこだわり無く併用します。次に表現ですが、切手や文字やスタンプを画面構成の要素として使います。イタリア・フィレンツェ留学の際に古い葉書や切手と出会ったのが始まりです。これらは人が生きた時間や歴史の象徴です。人々の喜びや悲しみが重なりひとつの時代が形成され、やがて終焉を迎えてスタンプが押される。その上に次の新たな命が重なっていくイメージです。文字は日本の古典文化の「画讃」や「ちらし書き」が原点で、絵画と文字を融合させる日本文化を現代的にグラフィックな解釈をした表現です。



1982　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業
1995　多摩秀作美術展大賞受賞・ベルギー美術賞展銀賞受賞（アントワープ王立アカデミー）
2003　第71回独立展　独立賞受賞（翌年 会員推挙）・昭和会展招待（'05 招待）
2004　損保ジャパン美術財団選抜奨励展グランプリ受賞・文化庁現代美術選抜展
2005　文化庁芸術家在外研修員（イタリア・フィレンツェ）
2009　個展（日本橋三越本店特選画廊 '12 '15 '18 '21 '24）
2013　フィナーレ選抜奨励展 輝く12の視座（損保ジャパン東郷青児美術館）
2020　望－歌会始御題によせて－（式年遷宮記念 伊勢神宮美術館）・ミニヨン展（銀座日動画廊）
2023~2024 独立美術協会90周年記念展「輝く日本油画」（銀座日動画廊及び日本橋三越本店）
収蔵　青梅市立美術館・北里大学・明治学院・佐久市近代美術館
現在　日本美術家連盟会員

馬越陽子おぶせ記念美術館　オープン!





「人間の大河–光りが暗闇を照らす時–」F200 2019年

今春、長野県小布施町の豊かな自然環境の中に「馬越陽子おぶせ記念美術館」が開館しました。おめでとうございます。4月22日オープニングセレモニーが170余名の参加で盛大に執り行われ、4月25日にはグランドオープンとなりました。馬越陽子会員の作品群は、18歳の頃より一貫して「人間」をテーマとし、「人間の大河」に至る90歳までの、300号を含む軌跡が一堂に会して圧巻です。小布施は、葛飾北斎が度々滞在したという歴史の街。美しい景観の「馬越陽子おぶせ記念美術館」にご来場いただき、ゆったりと流れる時間を、北斎館・岩松院（天井絵）など数多くある見どころも併せて、四季折々に散策されるのも楽しみではと思います。







馬越陽子おぶせ記念美術館

美術館所在地
〒381-0211 長野県上高井郡
小布施町雁田 1171 番地

営業時間
10:00～17:00（4月から11月）
10:00～16:00（12月、3月）
※入館は閉館 30 分前まで

YMAM CAFE 営業時間
10:30～17:00　L.O.16:00（4月から11月）
10:30～16:00　L.O.15:00（12月、3月）

休館日
毎週水曜日（祝日の場合は翌平日）
冬季休業：12月29日から翌年2月末日まで
（3月から通常営業）

奥谷博展 ―藝術無終―

2025年10月30日［木］―12月7日［日］
なかとさ美術館





2017年には文化勲章を受章し、現在も精力的な創作活動を続けておられる洋画家・奥谷博氏。
本展では、宿毛市所蔵の大作《瀑》をはじめ、館所蔵作品とあわせて、その豊かな芸術世界が紹介されました。
「藝術無終」を座右の銘とされる同氏は、ギャラリートークで「描くことは生きることそのもの」と述べられ、長年にわたり画業一筋に歩み続けてこられた思いを来場者に向けて語られました。
その真摯なお人柄と芸術への情熱に深い感銘が広がり、会場には温かな拍手が鳴り響きました。

四国西南端の高知県宿毛市を流れる松田川は、ゆったりと海へ注ぎ、周囲には切り立った岩肌や豊かな自然が広がります。わらであぶった野趣あふれる鰹料理など、この地ならではの風土に触れると、奥谷作品に描かれる表現の数々が、宿毛の自然に深く根ざしていることを実感しました。

輝け原石！ 2026 独立春季新人選抜展

2026年3月25日［水］―31日［火］
東京都美術館

2026年独立春季新人選抜展は、第92回展の入賞者及び選抜された会友・一般出品者、計254名により、桜花爛漫の上野公園の東京都美術館で開催されました。
「選抜展優秀賞」に三浦一博、「前田さなみ賞」に柴田功、吉原多美枝、大坂祥春、「選抜展奨励賞」に白井宏治をはじめ、15名の方々が受賞されました。
会場において諸先生方による示唆に富む講評が行われ、また懇親会では、会員や出品者との親睦を深める和やかで有意義な会となり、双方の交流を深める場ともなりました。











武藤　はるか

むとう　はるか
Haruka　MUTO

2011　筑波大学芸術専門学群美術専攻洋画コース　卒業
2018　Art Trail at 梅津「ハンカチ落としに」常陸太田市梅津会館／茨城
　　農村アートプロジェクト「ハンカチ祭りに」熊野神社／愛知
2019　タガワアートビエンナーレ「英展」入選／田川市美術館／福岡
2021　「第12回熊谷守一大賞展」優秀賞／アートビア付知交芸プラザ／岐阜
2022　「絵画の筑波賞2022」主催者特別賞／スタジオS／茨城
　　第89回独立展　奨励賞／国立新美術館／東京
2023　「第90回記念独立展」協会賞・会員推挙／国立新美術館／東京
2025　筑波大学大学院人間総合科学学術院人間総合科学研究群芸術学位プログラム洋画領域　入学（在学中）
現在　独立美術協会会員、茨城県芸術祭美術展覧会会員、常陸太田市美術協会会員

つくるということ

両親が陶芸家だったこともあり、茨城県の山奥で、自然に囲まれてのびのびと育ちました。大学では、絵画のマチエール（質感）に興味を持ち、油絵を学びました。卒業して就職すると同時に独立展へ出品するようになったのは、恩師である福満正志郎先生の影響です。先生には今も昔も指導教官としてだけでなく、人生の先輩としても、多くのことを教えていただいています。

当初は平面的な絵画を制作していましたが、出品を続けるうちに、「さまざまな物質とやりとりを重ね、その素材の持つ力と融合したい」という思いが強くなりました。次第に支持体や素材そのものが画面からせり出すような半立体的な表現へと変化し、現在の制作につながっています。

一方で、額装や使用素材で問題が生じることも多く、いつも課題を抱えています。それでも、温かく、時には厳しく受け入れてくださる独立展には感謝しかありません。



「ハンカチを拾いに」F300 2011年 油彩、アクリル（平面作品）
卒業制作

散歩大好き

最近は、いつでもどこでもスケッチブックを持って散歩し、出会った風景や素材をドローイングとして記録しながら、絵画作品へ展開しています。麻縄、石膏、粘土、建築塗料、木材などを用い、素材を編んだり、捻じ曲げたり、身体を使ってやりとりをする中で造形が生まれることが多いです。気に入った拾得物があることも……



幼少期



実家で窯焚き



福満先生と



ドローイングから形を探す様子



「にぎりつむII」変形130
2022年 麻縄、石膏、粘土、顔料
第89回独立展／奨励賞



「すいめんきょう」変形50 2022年
麻縄、石膏、粘土、染料、アクリル
茨城県芸術祭美術展覧会／
会員推挙



「あおばしみやまI」変形15
2022年 麻縄、石膏、粘土、油彩
絵画の筑波賞2022／主催者特別賞



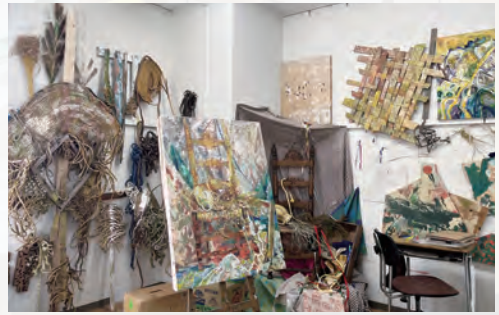
「くもみじI」変形130 2023年
麻縄、石膏、粘土、顔料、アクリル
第90回独立展／協会賞　会員推挙

教える、つながる

普段は私立高校で美術教諭をしています。授業や学校行事では生徒に助けられることばかりで、「教える」というより「一緒に学ぶ」感覚に近いです。地域の方々と関わりながら、美術館やイベントで生徒とワークショップも行っています。その自由な発想や、失敗を恐れず手を動かす姿勢から、日々多くの刺激を受けています。

もう一度、学ぶ

現在は職場の研修制度を利用し、大学院で再び学んでいます。20代の頃とは違い、実践を経たうえで技術や知識を見つめ直せることは、とても新鮮です。年齢が離れているにもかかわらず、同期として接してくれる仲間と、同じ課題で悩み、笑い合えることに幸せを感じています。やりたいことには何歳からでも挑戦できる！同様の制度を使うか迷っている人がいたら、ぜひ応援したいです。



再び大学アトリエへ



「すくつのしじま」変形200 2025年 麻縄、紐、石膏、粘土

独立展の魅力

独立展は、私にとって「挑戦し続ける場」です。大作が並ぶ空間で、自分は何をしたいのか、毎年問い続けています。答えが見つからず落ち込むばかりですが、そんな私に、家族のように、遠慮なく本音でぶつかってくれる先輩や仲間がいます。他の公募展にはない人との距離の近さや、圧倒的な飲み会の楽しさも魅力です。独立展に集う作家は本当に強靭な肉体と精神の持ち主ばかり。不安や迷いなど、それぞれに何かを抱えながらも、笑ったり怒ったりしながら前へ進む方々を尊敬しています。これからも、生きているものの痕跡を拾い集めながら、まだ出会ったことのない感覚を探し続けていきたいと思います。